

永観堂禪林寺所蔵 「善導大師像」

石川 温子

はじめに

京都・東山に位置する浄土宗西山禪林寺派の総本山永観堂禪林寺（以下、禪林寺）には、鎌倉時代の作と思われる「善導大師像」一幅が伝来する（【図1】以下本図と呼称する）。絹本着色、本紙寸法は七七・二×三九・七センチの比較的小さな画面である。

善導（六一三―六八一）は中国・唐時代に浄土教を大成した僧である。俗姓は朱氏で、臨淄（現在の山東省）、一説に泗州（現在の安徽省）の人とされ、幼少のうちに密州（現在の山東省）で出家し、後に石壁山の玄中寺にいた道綽（五六二―六四五）に師事した。師の寂後は、長安の悟真寺や光明寺に止住して浄土念仏を実践し一般に広めたという。その著書に浄土三部経の一つ『観無量寿経』の注釈書で、浄土教における称名念仏の綱要を示した『観無量寿経疏』がある。

善導の遷化から約四五〇年後、本朝平安末から鎌倉時代を生きた法然（長承二―建暦二、一一三三―一二二二）が著書を通じてその教えに共感し、善導の思想に基づく浄土教の弘通に努めた。そうし

たことから善導は浄土宗においては浄土五祖のうち、第一祖の曇鸞（?―?）、第二祖の道綽に次ぐ第三祖として尊崇を集めている。

本図は合掌し虚空を見つめて立つ善導を表す。背景には丹色の高欄、地面には敷瓦を配しここが寺院であることを示す。剥落が激しく確認しづらいが、善導の見つめる先には三体の小さな化仏が描かれている（【図2】）。

この様な善導像は、長安の光明寺において善導が念仏を唱えるところから光明が出現したという奇瑞を表したものとされる。同様の例としては、京都・知恩寺蔵「善導大師像」（重文、鎌倉時代、十三世紀）が上部の賛に紹興辛巳（一一六一）の年記を有するため、南宋本を写した可能性が高い作品として有名である。本稿ではあまり紹介されてこなかった禪林寺所蔵の「善導大師像」について、その造容と伝来を述べたい。

一、表現

善導は体に向かって左方に向け、顔をやや上空に傾けて合掌し虚空を見つめる。視線の先には三体の小さな化仏が浮かんでいる。面

貌は剥落があるものの、ふっくらとした頬、重い瞼、光を宿した瞳や白い歯が覗く口などが確認でき、温雅な面持ちである〔図3〕。

足元は画絹の欠失が特に多く確認しにくい¹が、この奇瑞の善導像に共通する様に片足を画面手前に向け、もう一方の足を画面と水平方向に向けていた痕跡がある。

空中の化仏はわずかに唇や蓮台、頭光の着彩と墨線による線描が確認できるのだが、三体とも立ち姿で左方を向いている。左方を向く善導像は珍しく、当初は右を向く法然像と対幅であった可能性が挙げられている²。なお知恩寺本や南北朝時代の作と思しき京都・幽玄齋本、兵庫・大覚寺本などは右方を向く。

また例えば、本図や知恩寺本の化仏が善導の口の延長線上に描かれるのに対し、幽玄齋本や大覚寺本では口の延長線上から外れた上空に描かれており、後者は奇瑞の内容と造形の関係性が希薄になっている。時代が降るほどに後者のようになるのであれば、本図は初発的な形式を保っていると見られる。

法衣の文様には胡粉によるものと金泥によるものがある〔図4〕。前者は剥落が多く確認しにくい³が、後者はよく残っている。

胡粉による文様は左肩に掛かる袈裟に見い出せる。五つの花弁と中央の蕊で構成される梅花文で、周りを点描による二重の同心円が囲む。この梅花と同心円の組み合わせを最小構成単位として田相を埋めている。この文様と同様のものは知恩寺本や京都・知恩院の「善導大師立像」(重文、鎌倉時代、十三世紀)の袈裟に使用され、また点描の円文は欠くが梅花文のみならば滋賀・聖衆来迎寺所蔵「伝善導大師像」(鎌倉時代)の袈裟にも認められる⁴。鎌倉時代には、この梅花文が善導の標識とされていたことを想像させる。

一方袈裟の行部分と右半身を覆う僧祇支、足元の裳に描かれる金泥の文様は、高麗仏画に特徴的な文様を模倣しており興味深い。まず僧祇支と裳にちりばめられた円文は、高麗仏画で頻用される唐草円文を模す。唐草円文は円の直径いっぱい⁵に三本線のS字の唐草を配し、余白を蕨手や渦巻きなどの精緻な文様で埋めるものである。

この様な唐草円文は例えば「阿弥陀如来像」(重文、大徳十年・忠烈王三十二年、一三〇六、東京・根津美術館)や「水月観音像」(重文、十四世紀、京都・大徳寺)など高麗仏画で広く用いられる⁶。

ただし本図の唐草円文は高麗仏画のそれと比べると非常に簡略化されている。円文の中に二本線のS字の唐草を配し、余白は波状線で埋めるなど、省略の感がある。さらに僧祇支と裳に同文様が配されていることなど、法衣の構造への理解が深いとは言えない。

また、袈裟の行部分の扁平な渦巻きを基調とした文様も、高麗仏画に見られるものである。「阿弥陀三尊像」(堺市指定文化財、十三—十四世紀、大阪・法道寺)の観音菩薩の胸部から下がる赤いリボンや「観経十六観変相図」(茨城県指定文化財、十三—十四世紀、茨城・大高寺)の堂内に坐す阿弥陀傍らの比丘の袈裟袖口などに見出せる。

管見の限り、善導の法衣に高麗仏画の文様を施す例は珍しく、本図を特徴づける要素である。金泥の文様は彩色や胡粉に比して剥落が少ない点、唐草円文が簡略化される点、本来別文様を配すべきである僧祇支と裳に唐草円文が配される点などから、後世の加筆になり、当初の文様が剥落した上から描いたと考えられる。現状の金泥文様が当初のものを描き起したもののなのか、或いは新たに上描きしたもののか直ちに判断はできないが、文様の簡略化が著しく後者の可能性が高いと考える。

二、光明寺における奇瑞の善導大師像

図像の受容について、知恩寺本を手掛りに確認しておきたい。善導が長安の光明寺において起こした奇瑞を描く作例の典拠には、宋代の戒珠撰『浄土往生伝』巻中の善導項の記述が相当すると思われる⁴。次の部分である。

(前略)導乃自念阿彌陀佛、如是一聲、則有一道光明、從其口出、或其十聲、至于百聲、光亦如之(後略)

即ち、善導が阿弥陀の仏名を一度唱えると、口より一筋の光明が出て、十声、百声唱えてもやはり光明が出たという。

しかし、ここで口より出るとされるのは光明であり、仏とは記していない。このことについて、小林太市郎氏は「後善導」と呼ばれる善導の後代に活躍した少康にも同様の奇瑞の記述があり、しかもこの場合口より出るのは光明ではなく仏とされることから、唐代あるいはそれ以後の成立当初、合掌僧が口より化仏を出す図像が実は少康を示していた可能性を述べる⁵。それと同時に南宋本を写したとき、知恩寺本の賛にある「紹興辛巳」(一一六一)の年記が示すように、既に南宋の時点ではこの図像は善導像として通用していたとする。知恩寺本の賛全文は次の通り。

唐善導和尚真像

四明傳法比丘曇省讚

善導念佛、佛従口出、信者皆見、知非幻術、是心是佛、人

人具定、欲知善導、妙在純熟、心池水靜、佛月垂光、葉風起波、生佛殊迴、

紹興辛巳二月一日

日本における図像の受容に関しては、この知恩寺本の賛から考察した裏辻憲道氏の指摘がある。裏辻氏は法然が行った逆修説法の記録の異本である滋賀・浄厳院『無縁集』五七日の条に次の様にあることから、了慧(寛元元一徳二、一二四三―一三三〇)が法然の法語集『漢語燈録』を集録する文永十一年(一二七四)以前に曇省の賛が知られており、さらに知恩寺本の祖本となったような画像が存在していた可能性を指摘する⁶。

(前略)導和尚ノ念佛シ給ニハ口ヨリ佛出給フ、曇省讚曰善導念佛スレバ佛従口出云々(後略)

更に補足するならば、親鸞(承安三―弘長二、一一七三―一二六二)が法然の法語類を編纂した『西方指南抄』(康元二、一二五七)にもまた同様の文が記載されることも確認できる⁷。次の通り。

(前略)導和尚ノ念佛シタマフニハ、口ヨリ佛出タマフ。曇省ノ讚ニ云。善導念佛佛従口出トイヘリ。同念佛ヲマフストモ。カマエテ善導ノコトク。口ヨリ佛出タマフハカリ。(後略)

この『西方指南抄』の例によって、曇省の賛が少なくとも康元二年の編纂以前には知られていたこと、また善導が口から仏を出現さ

せると認識されていることが判明するのである。

三、裏書について

本図の裏面には、中部（裏書①、【図5】）と下部（裏書②、【図6】）に、現状の総裏の紙色より幾分黄変した紙が貼付けられている。この裏書は現状に修理された際に旧表具から切り取られ貼り付けられたと思われる。

【裏書①】

善導大師鏡御影

【裏書②】

善導大師鏡御影

奉寄附筑前州福置住

常念寺桂空

寛永十三年

三月十四日 真空代

洛東禅林寺什物

寛文十三年癸丑曆

九月十日狼空代修補之

裏書①と②は手が異なる。①の方は擦れが多いため、②より古い旧表装の題簽を貼付けたものか。興味深いのは、その伝来を示す②である。

【裏書②】

・【一段目】 善導大師鏡御影

裏書①と同様、題名である。

・【二段目・三段目】 奉寄附筑前州福置住 常念寺桂空

筑前州福置とは筑前国福岡を指し、「常念寺」は後述するように、現在福岡市中央区大手門にある「浄念寺」の事と思われる（以下、浄念寺）。この浄念寺の住持「桂空」なる人物が、本図を禅林寺に寄付したことを記す。

浄念寺については（加藤純一・鷹取周成編、寛政十一、一七九九）『筑前国統風土記附録』に詳細が載る。⁸⁹ 要約すると次の通りである。

浄念寺は浄土宗西山派、京都禅林寺の末寺である。開山は桂空舜道（？―正保二、一六四五）、筑前国志摩郡波多江村（現在の福岡県前原市）出身。両親を早くに亡くして剃染の身となる。その後師を求めて諸国を遍歴し、豊前国の合元寺（現在の大分県中津市）の開山空誉（？―慶長十六、一六一二）に出会う。空譽に師事した後、師の勧めで上京し、西山派本山である粟生の光明寺に掛錫した。帰国後しばらくは裏糟屋郡新宮浦（現在の福岡県糟屋郡）の西念寺に住した。黒田長政（永禄十一―元和九、一五六八―一六二三）が筑前国に封ぜられたのに従い、空譽が福岡の智福寺に住するようになる。桂空は師を慕って福岡に入り、寺院の開創を志願し長政に寺地を賜り海龍山常念寺を開いた。櫛橋宗雪、佐谷隆齋、團安兵衛、白石監物などが壇徒となり協力して、慶長九年（一六〇四）に本堂が落成した。同十五年（一六一〇）に桂空は再び上京し、本山禅林寺に執奏を依頼し繪旨を得た。正保二年（一六四五）に七九歳にて

寂した。第四世の泰峯が寺号の「常」の字を「浄」に改めた。また寺内には、智福寺住空譽守欣大和尚と記した位牌と墓がある。

以上が大略である。

なお『筑前国統風土記附録』の本編である『筑前国統風土記』（貝原益軒著、元禄十六、一七〇三）にも浄念寺について若干説明がある⁹⁾。そこには、「此寺及大長寺は國中浄土宗西山派の号令を掌る。」とあり、筑前国の西山派寺院の中でも上位にあったことが窺える。大長寺とは同じく福岡の東職人町（現在の福岡市中央区）の浄土宗西山派の寺院である。

さらに『筑前名所図会』（奥村蘭玉著、文政四、一八二二）でも鳥瞰図が描かれており、江戸後期には名所としても認識されていたようである¹⁰⁾。昭和二十年（一九四五）の福岡大空襲で被害に遭ったため、現在の建築は戦後の再建になる。

以上、浄念寺の概略を述べた。これらのことから本図は筑前国の西山派寺院である浄念寺の開山桂空によって禅林寺に寄付されたことがうかがわれるのである。ここで、寄付の動機に関わる可能性があるため、桂空の師である空誉（？―慶長十六、一六一一）についても補足しておきたい。明治十三年（一八八〇）に江戸時代の『筑前国統風土記』『筑前国統風土記附録』『筑前国統風土記拾遺』などの諸書を参考に編纂された地誌、『福岡県地理全誌』の浄念寺の項には次の様にある¹¹⁾。

空誉は播磨国明石の人、高砂（現在の兵庫県高砂市）の西山派寺院である十輪寺の雁高上人の下で七歳にて剃髪し、十六歳で上京して禅林寺で修行し、二十歳で教旨を修めた。その後、天正十五年（一五八七）に黒田孝高（天文十五―慶長九、一五四六―一六〇四）が、

豊前中津に移った際には随従し、当地に合元寺を開創している。文禄・慶長の役でも朝鮮に渡りその陣中に随ったという。孝高の子である長政が筑前国を与えられた際には、福岡の橋口町にあった智福寺（現在は廃寺）を居住寺院として充てられたが、慶長十六年（一六一一）八月六日に長政に処刑され、桂空が夜間秘かに空譽の遺骸を運び出して寺中に葬った。後には願を立てれば成就するとして、空譽を拝する者が絶えなかったという。八月朔日から六日まで祭祀を行っていた。

以上が大略である。

これらの記録から、まず播磨国高砂の西山派寺院、十輪寺で出家した空誉が後に禅林寺で学び、同国姫路城の城代であった黒田孝高に従って豊前国へ下り、そこで桂空の師となったことがわかる。鎮西派が多数派の国にあつて、桂空が西山派の寺院を開創した経緯が見えてくる。

注目したいのは、開山桂空とその師空譽の結びつきの強さ及び当寺における空譽の存在感の大きさである。空譽が長政に処刑された理由には諸説あるが、寛政年間の作になる縁起によると黒田家の家臣後藤基次が出走して大坂城に籠り、長政が召し返そうとするも基次は従わず、そうした状況で、予てより昵懇であった空誉は基次に内情を漏らしているという讒言に遭い、処刑されたのだ¹²⁾。諸説あるため真偽不明だがいずれにせよ、寺では讒言によって処刑されたと考えられてきたのだろう。

現在も寺域の一角には空誉を祀った空譽堂がある。『筑前国統風土記附録』に「肖像及墳墓あり」と記されるので、この空譽堂の原型が寛政十一年以前にはあったことが知られる。

極楽往生を目指す浄土宗徒にとつて、処刑されて亡くなるという
ことは、非常に酷なものとして受け止められたと想像する。この師
の刑死という悲痛な出来事が、桂空個人に留まらず当寺で脈々と受
け継がれる空譽への尊崇そして供養の発端だったと考えられよう。

【四段目・五段目・六段目】

寛永十三年 三月十四日 真空代 洛東禅林寺什物

寛永十三年（一六三六）、真空の代に本図が禅林寺の什物となっ
たとある。『禅林寺誌』によると、「真空」とあるのは第四世真空
（？―正保二、一六四五）である。¹³ 在任期間は寛永十一年（一六三四）
から正保二年であり、本図が寄進された年の任職として矛盾はない。
また三月十四日という日付は善導の忌日と見做されていた日付で
ある。¹⁴ 江戸中期に活躍し、著述や教化に功績のある浄土宗僧、忍激
（正保二―正徳元、一六四五―一七一）による『善導大師別伝纂註』
（延宝八、一六八〇）には次のようにある。¹⁵

（前略）怡然長逝去春秋六十有九身體柔軟容色如常異香音楽
久而方歇時永隆二年三月十四日獨出新修或曰三月二十七日示
寂出帝王年代録二（中略）永隆二年者唐高宗年號當本朝四十年代天
武天皇白鳳十年辛巳迄今歲延寶八年庚申正當滿一千歲矣忌
日異說本朝通用三月十四日也（後略）

つまり、延宝八年（一六八〇）時点で、善導の忌日は永隆二年三
月十四日と二七日の二説あったが、本朝で通用していたのは前者の

三月十四日であることが知られる。桂空は善導の忌日に合わせて寄
付したのである。

この寛永十三年（一六三六）という年は、慶長十六年（一六一一）
八月に亡くなったとされる空譽の二五回忌を終えた翌年に当たる。
本図を寄付する動機としては禅林寺が本山であるから、といった単
なる本末関係のみならず、桂空の個人的な師空譽への供養の意味も
あったかもしれない。

【七段目・八段目】

寛文十三年癸丑曆 九月十日粮空代修補之

寛文十三年（一六七三）の九月十日、粮空の代に本図を修理した
旨が記される。粮空とあるのは第四世養空（？―延宝七年、一六
七九）である。裏書②は養空が書いたと思われる。なお、旧箱蓋も
現存しており、そこには七段目、八段目の裏書きと同様に養空が修
理した旨が書かれる。

以上裏書②から得られた情報についてまとめよう。

本図は寛永十三年三月十四日に筑前国福岡に位置する浄土宗西山
派寺院、浄念寺の開山桂空より、本山禅林寺に寄付された。寄付時
の住持は第四世真空、寛政十三年の修理は第四世の養空によつ
て行われたものであった。

桂空が本図を寄付した動機に、不遇の死を遂げた師、空譽の存在
があった可能性を述べた。空譽堂などに象徴される、現代にまで至
る空譽への供養は、師の刑死に接した桂空が受けた衝撃の大きさを

物語る。本図の寄付は本末関係に加えて、こうした空響への供養を兼ねたものだったかもしれない。しかも善導の法衣に高麗の文様が施されたのは偶然なのか、空響の朝鮮渡航の経歴をほのかに連想させるものでもある。

おわりに

先に法衣の金泥文様が高麗仏画の模倣であると述べた。これが後代の補筆であるとして、いずれの時点、いずれの場所で賦されたか明確な答えは出せないが、本図が巡った経緯として一つの見通しを提出しておこう。

本図の寄進者桂空が開創した浄念寺が建つ福岡の地は、大陸からの仏画流入の窓口であり、文様の手本となる高麗仏画作例が身近にあったと想像される。そのような地理的状況下で、異国の仏画の文様を、異国の祖師の法衣へと転用することにしたのだと思われる。

寛永期までに筑前国に伝来していた鎌倉時代制作の善導大師像が、桂空が入手した時点か或いはそれ以前に、法衣の装いを新たにされ、本山である禅林寺へと寄付されるに至ったのではないか。想像の域を出ないが、現時点で得られた資料からはこの様な経緯を推測した次第である。

(大阪市立美術館学芸員)

注

(1) 作品解説『京都・永観堂禅林寺の名宝』大阪市立美術館、一九九六年

(2) 高間由香里「知恩寺所蔵重要文化財善導大師像について」『芸術研究』

第二四号、二〇一一年

(3) 鄭子澤「静粛の美―高麗仏画」『高麗仏画―香りたつ装飾美―』泉屋博古館・根津美術館 二〇一六年

(4) 『大正蔵』巻第五一、一一九頁

(5) 小林太市郎「高僧崇拜と肖像の芸術―隋唐高僧像序論」『仏教芸術』第三三号、一九五四年

(6) 裏辻憲道「善導大師像の一考察」『仏教芸術』第六号、一九五〇年

(7) 『大正蔵』巻第八三、八六一頁

(8) 加藤一純・鷹取周成編、川添昭二・福岡古文書を読む会校訂、『筑前国続風土記附録』上巻、文献出版、一九七七年

(9) 貝原益軒『筑前国続風土記』『益軒全集』巻第四、益軒全集刊行部(隆文館内)一九二〇―一九二二年

(10) 奥村蘭玉、春日古文書を読む会校訂『筑前名所図会』文献出版、一九八五年

(11) 白井浅夫編『福岡県地理全誌』は明治五年から同十三年にかけて編集された福岡県(旧筑前国一五郡)の地誌。『福岡県史』近代史料編(十二)福岡地理全誌(一)、一九八八年

(12) 前掲注十一

(13) 稲村修道『禅林寺誌』法蔵館、一九一三年

(14) 『平戸記』寛元二年(二二四四)の三月十四日条にも、善導の忌日に二説あることが記され、既に鎌倉時代にはこのような状況だったことが知られる。「晴、今日有善導和尚御忌日之説(其廿七歳、而故空阿弥陀仏有此説)」また、坪井俊英氏によると、善導の入滅年寺を明記するものは北宋の王古撰『新修往生伝』巻中(逸書、『類従五祖伝』の中に引用されるのみ。)の永隆二年三月十四日のほかには、『帝王年代録』に同三月二七日と記載されるのみである。「伝法における半金色善導像の形成」『仏教大学研究紀要』第三六号、仏教大学学会、一九三九年

(15) 『浄土宗公書』巻十六、九六頁

付記

本図掲載のご許可を賜りました、永観堂禅林寺執事長奥垣内圭哲様に心より感謝申し上げます。



【图2】



【图3】



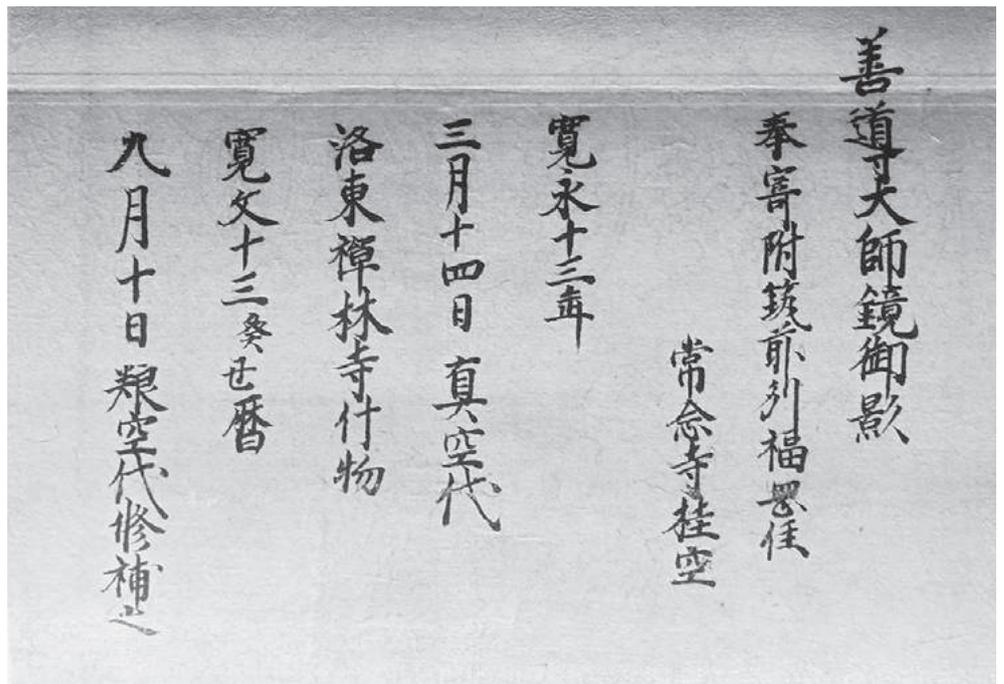
【图1】



【图5】



【图4】



【图6】

善導大師鏡御影

奉寄附茲前列福墨住

常念寺桂空

寬永十三年

三月十四日真空代

洛東禪林寺什物

寬文十三癸世曆

八月十日癸代修補之